

科学研究費助成研究「『狭衣物語』を中心とした平安後期言語文化圏の研究」
グループA 『狭衣物語』の地名表現調査 ―平安朝文学における分布・一覧―

1 データの主旨

本データは、『狭衣物語』に登場する地名表現が平安時代の仮名文学においてどのようなあらわれかたをしているかについて、その一覧と分布を表の形にしたものである。ここでは、まず基礎データを作成していこうという意図により、小学館の『新編日本古典文学全集』を底本とし、そこから抽出した地名表現に立脚して調査を進めた。

本データで「地名表現」という術語を用いたのは、具体的にその土地が物語内に登場するしないにかかわらず、あくまでも「表現」としての地名を重視することを基本姿勢としたため、例えば、物語中の和歌において歌枕として、あるいは比喩として登場した地名についても「表現」として物語に登場しているものと考え、調査の対象とした。データベースの基礎となる調査においては対象作品をできるだけ広く網羅的に捉えようと務め、それによって平安後期言語文化圏における地名表現のあり方が、先行作品からの影響や後続作品への展開を視野に入れる形で浮かび上がることを目論んでいる。

本調査に関しては、調査の性格上、調査対象の範囲・認定を含め、多くの課題を残しているのが現状である。調査実施者としてはさらにデータの精度をあげ、よりデータベースとして利用度の高い形のものなんらかの形で発信することを考えていることを付言したい。(問い合わせ先：下鳥朝代：shimo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp)

2 調査について(調査対象及び方法)

調査の範囲は平安時代の仮名による散文文学作品および和歌(歌集)とし、グループAの4名が地名表現を分担して調査に当たった。分担の実際については本文書の末尾を参照されたい。

歌集の調査においては、基本的に和歌本文のみを対象とし、適宜参考となる場合に関してのみ、詞書・左注・判詞についても取り上げた。(「覚書」ファイル参照。)

調査対象とした具体的な作品は以下の通りである。「分布ファイル」における分類にしたがってア～サに分けて示す。

ア＝初期物語(竹取物語・うつほ物語・落窪物語)

イ＝源氏物語

ウ＝後期物語(浜松中納言物語・夜の寝覚・とりかへばや物語・堤中納言物語)

エ＝歌物語(伊勢物語・大和物語・平中物語・篁物語・多武峰少将物語)

オ＝日記文学(土佐日記・蜻蛉日記・枕草子・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記)

カ＝歴史物語(栄花物語・大鏡)

キ＝説話文学(今昔物語集・古本説話集)

ク＝勅撰和歌集(古今集から千載集まで)

ケ＝私撰集(新撰万葉集から月詣和歌集まで(対象は和歌のみ))(『新編国歌大観』第二卷の2(歌集番号)から12まで)

コ＝私家集(小町集から残集(西行)まで(『新編国歌大観』第三卷の5(歌集番号)から128まで))

サ＝歌合・定数歌(1191年以前に成立したものに限る)

地名表現の用例調査においては下記の索引類を利用した。

【ア初期物語】

竹取物語

・室伏信助訳注『新版・竹取物語』(角川書店、2001年、角川文庫)(同書巻末の索引を参照)

・山田忠雄編『竹取物語総索引』(武蔵野書院、1958年)

うつほ物語

・宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引』(笠間書院、1975年)
(室城秀之・西端幸雄他『うつほ物語の総合研究』勉誠出版も参照)

落窪物語

・松尾聡・江口正弘編『落窪物語総索引』(明治書院、1967年)

【イ源氏物語】

源氏物語

・柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎編『源氏物語索引』(岩波書

店、1999年、新日本古典文学大系別巻)

【ウ後期物語】

夜の寝覚

・阪倉篤義・高村元継・志水富夫編『夜の寝覚総索引』（明治書院、1974年）

とりかへばや物語

・鈴木弘道編『とりかへばや物語総索引』（笠間書院、1977年）

浜松中納言物語

・池田利夫編『濱松中納言物語総索引』（武蔵野書院、1989年）

（同書「日本古典文学大系との頁行数対照表」によって岩波古典文学大系本の該当頁行

を対照した。）

堤中納言物語

・土岐武治『堤中納言物語 校本及び総索引』（風間書房、1970年）

【エ歌物語】

伊勢物語

・大野晋・辛島稔子編『伊勢物語総索引』（明治書院、1972年）

・西端幸雄・木村雅則『歌物語総合語彙索引』（勉誠社、1994年）

大和物語

・塚原鉄雄・曾田文雄編『大和物語語彙索引』（笠間書院、1970年）

・西端幸雄・木村雅則『歌物語 総合語彙索引』（勉誠社、1994年）

平中物語

・曾田文雄『「平中物語」研究と索引』（溪水社、1985年）

・西端幸雄・木村雅則『歌物語 総合語彙索引』（勉誠社、1994年）

篁物語

・小久保崇明編『篁物語 校本及び総索引』（笠間書院、1970年）

・水府明德会・平林文雄編著『増補改訂 小野篁集・篁物語の研究』（和泉書院、2001年）

多武峰少将物語

・小久保崇明編『多武峯少将物語 本文及び総索引』（笠間書院、1972年）

【オ日記文学】

土佐日記

・小久保崇明・山田瑩徹編『土佐日記 本文及び語彙索引』（笠間書院、1981年）

蜻蛉日記

・西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編『平安日記文学 総合語彙索引』（勉誠社、1996年）

枕草子

・榊原邦彦 他編『枕草子総索引』（右文書院、1968年）

和泉式部日記

・東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『和泉式部日記総索引』（武蔵野書院、1959年）

・西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編『平安日記文学 総合語彙索引』（勉誠社、1996年）

紫式部日記

・西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編『平安日記文学 総合語彙索引』（勉誠社、1996年）

更級日記

・西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編『平安日記文学 総合語彙索引』（勉誠社、1996年）

讃岐典侍日記

・鎌田廣夫・相沢鏡子編『讃岐典侍日記 本文と索引』（おうふう、1998年）

【カ歴史物語】

栄花物語

・高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語 本文と索引』（武蔵野書院、1985年）

大鏡

・佐藤謙三校注『大鏡』（角川書店、1969年、角川文庫）（同書巻末の地名索引を参照）

【キ説話文学】

今昔物語集

・小峯和明編『今昔物語集索引』（岩波書店、2001年、新日本古典文学大系別巻）

古本説話集

- ・山内洋一郎編『古本説話集総索引』（風間書房、1969年）
- 【ク勅撰和歌集～サ歌合・定数歌】
- ・『新編国歌大観CD-ROM』（角川書店）

3 覚書ファイルについて

「覚書ファイル」は、地名表現の調査にあたってどのような基準や例外を設けたか、等についてまとめたものである。「地名」の判定、調査の範囲など、個別に対応する必要性が生じた場合について、覚書ファイルに記載した。「一覧・分布」ファイルと対応させるために、地名表現の五十音順となっている。

4 一覧・分布ファイルについて

a 作成に際して使用したソフト及びバージョン

Microsoft Excel 2002

b ファイルの構成

「一覧・分布ファイル」は

「〔1〕分布①『狭衣物語』に登場する地名表現のみ（抄出）」

「〔2〕分布②地名表現の広がり（全）」

「〔3〕一覧」

の3つのシートからなる。

以下、それぞれのシートを「分布①」シート、「分布②」シート、「一覧」シートと略表記する。

「分布①」と「分布②」の二種類のシートを設けたのは、『狭衣物語』の地名表現の独自性と広がりとの両面をとらえることができるようにとの意図による。（「独自性」と「広がり」の意味するところについては、下記dを参照されたい。）

「分布①」シートによって『狭衣物語』の地名表現の特色や独自性を見ることができるようにとの意図で抄出している。「分布②」シートと「一覧」シートは対応しており、それによって、『狭衣物語』に登場する地名表現の平安朝仮名文学における使用状況が立体的に浮かび上がることを企図している。

c 凡例（ファイル全体について）

c-1 『狭衣物語』については現行の代表的なテキストである『新編日本古典文学全集（小学館）』（「新全集」）『日本古典文学大系（岩波書店）』（「大系」）『日本古典集成（新潮社）』（「集成」）の該当箇所をそれぞれ示した。

c-2 『狭衣物語』についてはテキストの略称（「新全集」「集成」については巻数も）・ページ数の組み合わせで本文の位置を示した。

例えば、新全集①133とある場合は『新編日本古典文学全集（小学館）』の①巻の133ページが該当箇所であることを示す。

c-3 「新全集」の本文では地名表現となっているが、他テキストでは地名表現となっていない場合は「分布①」「分布②」シートでは特に示さず、「一覧」シートの「本文・和歌」欄に「ナシ」と記載した。（例外的な措置については「覚書」ファイルを参照。）

d 各シートについて

d-1 「分布①」シートについて

d-1-1 主旨

『狭衣物語』の地名表現の平安朝仮名文学における分布を用例数によって示した表である。「分布①」シートは『狭衣物語』に登場する地名表現そのものについてのみの抄出データとなっている。「分布②」では『狭衣物語』に登場する地名表現の広がりをとらえるため、『狭衣物語』に登場する形そのものではない形についてもデータ化しているが、「分布①」は『狭衣物語』に登場する語形のみについて用例数による分布を確認することができるように抄出データとしてある。

（例・「分布①」シートでは「逢坂」「逢坂山」という『狭衣物語』に見られる表現（語形）についてのデータのみを抄出しているが、「分布②」シートでは、「逢坂の関」「逢坂の関路」等「逢坂」に関連する各種表現をも含んでのデータとなっている。）

d-1-2 見方

同一地名表現の分布を用例数によって示している。作品は上述の「2調査について」の

項目にあげたようにア～サの11項目に分類し、横軸としてある。項目ごとに1列とし、作品名と用例数をあげてある。(「イ 源氏物語」では作品名ではなく巻名を示してある。)

例えば、「安積の沼」を見ると、「オ 後期物語」の列に「堤 2」とあるが、これは『堤中納言物語』に2例の用例があるという意味である。

なお略称は、散文作品については一般的に通用される呼び方とし、和歌(歌集)については基本的に『新編国歌大観』のものにしたがって示した。

d-2 「分布②」シートについて

d-2-1 主旨

「分布①」のシートが『狭衣物語』に登場した語形のみをあげているのに対し、類例表現の用例を加えたのが「分布②」シートである。「分布②」シートはそのまま地名表現の並び順が「一覧」シートと対応するように作ってある。

d-2-2 見方

基本は「分布①」と同じである。

地名の並び順は基本的に五十音順であるが、「中山」のように「～の中山」を取り上げる場合は「中山」の項目の後に「～の中山」がくるように配列している。

d-3 「一覧」シートについて

d-3-1 主旨

『狭衣物語』にみえる地名表現が平安時代の仮名文学においてどのように出現しているかを、文脈がある程度把握できる長さで抜き出し、一覧にしたデータである。地名表現は「分布②」シートと対応して配列してあるため、「分布②」シートを参照すると、地名表現の使用状況が立体的に見えることになる。

d-3-2 凡例

地名の並び順は基本的に五十音順であるが、「中山」のように「～の中山」を取り上げる場合は「中山」の項目の後に「～の中山」がくるように配列している。

作品名の略称については上述(d-1-2)のとおりである。散文作品の場合、作品名の後の数字は底本としたテキストにおけるページ数を示す。底本が複数冊にわたる場合には、その巻数もわかるようにした。さらに、歌物語・『枕草子』については段数を、『源氏物語』を除く長編物語・『蜻蛉日記』・歴史物語・『古本説話集』においては巻数ないし巻名の略称を、『堤中納言物語』では作品名の略称を、それぞれ()内に記した。『今昔物語集』については、(巻一語数)の順で示してある。『源氏物語』については作品名を省き巻名のみをあげた。和歌の場合は、歌集名の後の数字は新編国歌大観番号を示しており、勅撰集と一部の私撰集については()内に部立を記した。

例1・「安積の沼」の項に「平中(37段)529」とあるが、これは『平中物語』の37段の用例で、底本(新全集)の529ページ所載であることを示す。

例2・「安積の沼」の項に「堤(逢坂)434」とあるが、これは『堤中納言物語』の「逢坂越えぬ権中納言」の用例であり、底本(新全集)の434ページに所載されていることを示す。

例3・「逢坂」の項に「若菜上④81」とあるが、これは『源氏物語』の「若菜上」巻の用例であり、底本(新全集)の④巻81ページに所載されていることを示す。

例4・「逢坂」の項に「今昔(24-23)③305」とあるが、これは『今昔物語集』の巻24の第23語の用例であり、底本(新全集)の③巻305ページに所載されていることを示す。

例5・「安積の沼」の項に「古今677(恋4)」とあるが、これは『古今和歌集』の新編国歌大観番号677番の和歌で、部立は「恋四」であることを示す。

d-3-3 引用本文は、散文作品は基本的に小学館刊行の新編日本古典文学全集によるが、『篁物語』『多武峰少将物語』『古本説話集』の3作品については下記の本文によった。また和歌は、角川書店発行の新編国歌大観CD-ROMによった。

※『篁物語』 遠藤嘉基・松尾聰校注『篁物語 平中物語 濱松中納言物語』(岩波書店、1964年、古典文学大系)による。

※『古本説話集』 三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』(岩波書店、1990年、新日本古典文学大系)による。

※『多武峰少将物語』 小久保崇明編『多武峰少将物語 本文及び総索引』(笠間書院、1972年)

d-3-4 「文献名」欄に※印があるものは、原則の調査範囲に対して例外的であることを示す。例えば、歌集については原則的に和歌本文のみを調査対象としているが、用例稀少などの事情により詞書からの用例をあげている場合は原則から外れることになるので、他と区別するため、※印がついている。

例1・「北山」の項で「※古今(春下)95」とあるが、これは原則では取り上げないはずの『古今和歌集』の詞書を例として取り上げていることを示している。

例2・「うしろの岡」の項で「※古六帖1045」とあるが、これは本文中の「うしやの岡」を参考のために一覧に含めたために原則から外れることを示す意味で「※」を付した。

d-3-5 本文については、和歌の場合は引用の初めに「ウ)」を付けて示した。同様に、判詞である場合は「判)」、左注の場合は「左)」を付した。連歌については、引用の初めに「ウ)」とし、句の切れ目に／を入れ、さらに引用の末尾に「(連歌)」と記した。

d-3-6 和歌の詠者については、勅撰和歌集と散文作品において詠者が確定できる場合のみ引用末尾に()に入れて示してある。その比定は底本にしたがった。

※地名調査分担

乾澄子…安積の沼、飛鳥井・飛鳥川、安達、井手、岩垣沼、太秦、江口、音無の里・音無の滝、おぼろの清水、木幡、衣の関、園原、とかへる山、十市の里、長門、梨原、難波、西山、仁和寺、陸奥、向ひの岡、虫明けの瀬戸、室の八島

下鳥朝代…朝津の橋、有栖川、和泉の滝、石の上、稲淵・稲淵の滝、猪名山、妹背山、大堰川、帰る山、住吉の里、竹生島、土佐、嘆きの森、双の岡、比叡の山、古野、武蔵野、室戸、安の河原、吉野川・吉野の滝・吉野山、姨捨・姨捨山

萩野敦子…浅間の山、逢坂・逢坂山、板田の橋、浮島、うしろの岡、宇治の川、大原野、春日、神山、亀山、賀茂・賀茂の川・賀茂の社、北山、慈心寺、常盤・常盤の森、中山、なぐさの浜、野中の清水、平野、船岡、益田の池、緒絶の橋

宮谷聡美…安楽寺、石山、伊勢、葛城、唐泊、木の丸殿、越、嵯峨・嵯峨野、信田の森、白山、鈴鹿川、須磨の浦、筑紫、後瀬の山、端山、備前、富士の山、三河、御手洗川、もる山、八橋、横川、小倉山、小野

地名表現	狭衣物語	ア初期物語	イ源氏物語	ウ後期物語	エ歌物語	オ日記文学	カ歴史物語	キ説話文学	ク勅撰集	ケ私撰集	コ私家集	サ歌合・定数歌	シその他	
1 安積の沼	新全集①98			堤	2 平中	1	大鏡	1	古今	1 新撰和	1 忠見	1 堀河百	2	
2 安積の沼	大系80								後拾遺	1 古六帖	2 信明	1 永久百	1	
3 安積の沼	集成(上)76								金葉二	2	元真	1 為忠初	2	
4 安積の沼	新全集①99								金葉三	1	小大君	1 久安百	1	
5 安積の沼	大系80										好忠	1 六永五	1	
6 安積の沼	集成(上)77										保憲女	1 郁根合	1	
7 安積の沼											能因	3 権大合	1	
8 安積の沼											伊大輔	1 中宮合	1	
9 安積の沼											範永	1 新中合	1	
10 安積の沼											為仲	2		
11 安積の沼											六条修	1		
12 安積の沼											散木	3		
13 安積の沼											林葉	1		
14 浅間山	新全集②262								古今	1 古六帖	2 貫之	1		
15 浅間が山	大系375								後撰	1	重之	1		
16 浅間の山	集成(下)237										海人	1		
17 浅間の山	新全集②262										相模	2		
18 浅間の山	大系376										江帥	1		
19 浅間の山	集成(下)238										林葉	1		
20 浅間の山											匡衡	1		
21 浅間の山														
22 朝津の橋	新全集②186					枕	1						催馬楽	1
23 朝津の橋	大系327													
24 朝津の橋	集成(下)168													
25 飛鳥川	新全集①124	うつほ	1			土佐	1 栄花	1	古今序	1 新撰和	1 小町	1 堀河百	1	
26 飛鳥川	大系96	落窪	1			枕	1		古今	4 古六帖	10 中務	1 久安百	1	
27 飛鳥川	集成(上)98								後撰	8 和漢朗	1 元真	2 謎合	1	
28 飛鳥川	新全集①124								拾遺	1 後葉	1 順集	1 清輔合	1	
29 飛鳥川	大系96								後拾遺	1 月詣	1 元良	1 実国合	1	
30 飛鳥川	集成(上)98									玄玉	1 赤染	3 建春合	1	
31 飛鳥川	新全集①131										散木	3 三十六	1	
32 飛鳥川	大系101										林葉	3 深窓秘	1	
33 飛鳥川	集成(上)104										教長	1 中古六	1	
34 飛鳥川	新全集①141										忠度	1		
35 飛鳥川	大系107										林下	1		
36 飛鳥川	集成(上)112													
37 飛鳥井	新全集①78		須磨	1		枕	1				散木	2 為忠後	1	
38 飛鳥井	大系67										林葉	1		
39 飛鳥井	集成上60													
40 飛鳥井	新全集①83													
41 飛鳥井	大系71													
42 飛鳥井	集成(上)64													
43 飛鳥井	新全集①84													
44 飛鳥井	大系71													
45 飛鳥井	集成(上)65													
46 飛鳥井	新全集①92													
47 飛鳥井	大系76													
48 飛鳥井	集成上72													
49 飛鳥井	新全集113													
50 飛鳥井	大系90													
51 飛鳥井	集成上88													
52 安達(まゆみ)	新全集①82								古今	1 古六帖	1 重之	1		
53 安達(まゆみ)	大系70								拾遺	2 玄玄	1 小大君	1		

228	石の上																	能宣☆	1					
229	石の上																	伊大輔☆	1					
230	石の上																	摂津	2					
231	石の上																	経盛	1					
232	石の上																							
233	板田の橋	新全集②222									千載	1	古六帖	1	大斎院	1	堀河百	2						
234	板田の橋	大系350											月詣	1	和泉集	2	為忠初	1						
235	板田の橋	集成(下)201													散木	1								
236	板田の橋														基俊	1								
237	板田の橋														林葉	1								
238	板田の橋														重家集	1								
239	板田の橋																							
240	和泉の滝	新全集②65																						
241	和泉の滝	大系249																						
242	和泉の滝	集成(下)53																						
243	稲淵	新全集①67							枕	1								実家	1					
244	稲淵	大系60																						
245	稲淵	集成(上)51																						
246	稲淵の滝	新全集①25																基俊	1					
247	稲淵の滝	大系220																						
248	稲淵の滝	集成(下)14																						
249	稲淵の滝	新全集②22																						
250	稲淵の滝	大系34																						
251	稲淵の滝	集成(上)16																						
252	岩垣沼	新全集①34			寝覚	1						拾遺	1	古六帖	2	伊大輔	1	堀河百	1					
253	岩垣沼	大系39										後拾遺	1	今撰	1	散木	1	久安百	1					
254	岩垣沼	集成(上)24										千載	1			基俊	1	六天三	1					
255	岩垣沼															重家集	1	郁根合	1					
256	岩垣沼															長秋	1							
257	妹背(の)山	新全集①109			藤袴	2	とりかへ	1	平中	3	蜻蛉	1	栄花	2	古今	1	古六帖	6	宗于	1	堀河百	1	万葉	3
258	妹背(の)山	大系219							篋	2	枕	1			後撰	2	新撰和	1	元輔	1	為忠初	1		
259	妹背(の)山	集成(下)12													拾遺	2		篋集	2	関白合	1			
260	妹背(の)山	新全集①296													金葉二	1		安法	1	四条宮	1			
261	妹背(の)山	大系													金葉三	1		惠慶	1	治承合	2			
262	妹背(の)山	集成(下)12																好忠	1	別雷合	1			
263	妹背(の)山	新全集②20																長能	2					
264	妹背(の)山	大系87																高遠	2					
265	妹背(の)山	集成(上)85																和泉集	1					
266	妹背(の)山	新全集②20																定頼	1					
267	妹背(の)山	大系208																出羽弁	2					
268	妹背(の)山	集成(上)248																散木	2					
269	妹背(の)山	新全集①109																行尊	1					
270	妹背(の)山																	頭輔	1					
271	妹背(の)山																	田多	1					
272	妹背(の)山																	清輔	2					
273	妹背(の)山																	重家集	1					
274	妹背(の)山																	教長	1					
275	妹背(の)山																	有房	1					
276	妹背(の)山																	輔尹	1					
277	妹背(の)山																	匡衡	1					
278	妹背(の)山																	道濟	1					
279	妹背(の)山																	主殿	2					
280	妹背(の)山																	出観	1					
281	妹背(の)山																	風情	2					

『狭衣物語』の地名表現調査—平安朝文学における分布・一覧—
【方針及び覚書】

※地名の後に「の」の入らない形のものもあるが、支障がない限り、「の」の入る形と区別しなかった。例えば、「伊勢国」は「伊勢の国」と同じとみなし、「伊勢」の項に入れた。

安積の沼……

花かつみあるいは菖蒲の名所としてしられ、多くの歌に詠まれてきた。が、「水」との関係で詠まれたのは『狭衣物語』における作中詠歌が始めてであり、のちに『堀河百首』にも見られる。

「安積」という地名はあまり登場しないが、関連する歌枕として、『狭衣物語』には出てこないが、「安積山」がある。『古今和歌集』の仮名序で「難波津」の歌とならんで歌の父母とされた「あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは」で有名な歌枕なので、参考までに取り上げた。

浅間……

『狭衣物語』では「浅間の山」という形で出てくる。「浅間山」「浅間が山」はこれと同類項として扱い、「浅間」「浅間の嶽」「浅間の嶺」を類例表現として調査した。

なお歌集からの用例は和歌本文のものに限った(詞書・左注等は含まない)。←削除

朝津の橋……

『狭衣物語』以外では『枕草子』の用例が見られる。催馬楽の「浅水」に「浅水の橋のとどろとどろと 降りし雨の…」とある。

安達……

「まゆみ」との関係で使われることが多い。「安達原」と「安達野」は別項目にしたが、それ以外は「安達」に含む。

逢坂……

『狭衣物語』では「逢坂」「逢坂山」という形で出てくる。同じ形の用例(「逢坂の山」は「逢坂山」と同項目とした)を調査すると同時に、用例数としては最も多い「逢坂の関」、「逢坂の関路」等の「逢坂の関～」、「逢坂の里」を類例表現として調査した。

安楽寺……

歌集については、和歌中の用例がないので詞書中の例を挙げた。

石山……

「石山」の用例の大半は、「石山寺」のことであり、「石山に詣づ」「石山に願を立つ」「石山に籠る」などの用例が多いことから、「石山寺」「石山詣(御石山詣)」も立項した。

伊勢……

催馬楽曲名「伊勢の海」や『伊勢物語』を表すものは含まないが、それらが掛詞として使われている場合には採った。人を表す使い方の「伊勢の御息所」「伊勢の守」「伊勢の御」は含まない。

『今昔物語集』巻23第13話には、「共伊口ノ国ニ有テ、致頼進テ惟衡ヲ罰ムトシテ合戦スル間ニ、」があり、「伊勢国」のことであろうとされるが、確例ではないので除外した。

なお、この点については、今昔の会『今昔物語集地名索引』(笠間書院)を参照した。「伊勢の海」と「伊勢のあま(海人)(海士)」、そしてその重複した用例が多く、あまが製塩の仕事に従事し、海藻(め)を採り、貝を拾い、舟を操り、釣りをするさまが多く和歌に詠まれている。和歌では「伊勢」の後に間投助詞「を」がつく場合もある。平安後期になると、「伊勢の浜荻」も多く詠まれるようになる。

「伊勢島」は、『日本国語大辞典』(第二版)によると、「大和島」と同様の歌言葉であり、意味は「伊勢」と同じだが、「伊勢島」で一語なので立項した。「伊勢路」も立項

した。「伊勢人」は用例を挙げなかった。

石の上……

完全に枕詞としての用法とみなせるものは除外してある。基準はかなりゆるやかに設定した。

板田の橋……

「板田」でも調査したが単独で用いられる例はないため、「板田の橋」を定着した地名表現と認定した。先行例は稀少で、『狭衣物語』の影響からか院政期に及んで若干使用例が増えている。

和泉の滝……

『狭衣物語』のみに見られた。集成では「和泉の嶽」。なお、「和泉の滝」については、「和泉」などの類例表現の有用性が見られないため、「和泉の滝」のみを調査対象としている。

稲淵……

『狭衣物語』以外では『実家集』の「ものがたりのなによするこひ」の1例のみ。

稲淵の滝……

『狭衣物語』以外では『基俊集』の1例のみ。

妹背山……

『狭衣物語』では「ある本歌」の1例（「妹背の山」、「大系」「集成」になし）を除くと「妹背山」。ここでは「妹背山」「妹背の山」を同一項目とした。類例表現として「妹背川」をあげた。『狭衣物語』では『源氏物語』藤袴巻の柏木の玉鬘への複雑な思いのあらわれとしての表現効果を引き継ぎながら、狭衣と源氏宮の擬似兄妹関係を象徴する地名表現として機能する。

うしろの岡……

「うしろの岡」は『狭衣物語』諸注釈でも「未詳」とされる。為定本や『下紐』では「うしやの岡」。用例も全くなく、かろうじて『古今六帖』に歌語「うしやの岡」の例があるのみ。近世桂園派歌人による家集『広沢輯藻』の詞書に「うしろの岡」とあるのが新編国歌大観によるところ唯一の用例であったので、これも参考として掲出した。

宇治……

周知のとおり『源氏物語』続編や『とりかへばや』では物語の舞台のひとつとなっている宇治であるが、『狭衣物語』では純粋なレトリックとしての歌語「宇治の川長」が出てくるのみである。この「宇治の川長」は『源氏物語』橋姫巻に拠ったことが明らかな表現であるが、この2例を除いて平安朝に用例がない。ここでは同類項として「宇治の川～」（「宇治の川風」「宇治の川波」）表現を掲げることとし、平安朝文学における「宇治」についても総調査し、単独で出てくる「宇治」のほか「宇治の川（宇治川）」「宇治路」「宇治殿（宇治の殿）」「宇治の郡」「宇治の里」「宇治の大將」「宇治の玉姫」「宇治の宮」「宇治の若君」「宇治の渡り（わたり）」「宇治の院」「宇治橋（宇治の橋）」「宇治の橋姫」「宇治の橋人」「宇治の橋守」「宇治人」「宇治山」「宇治の山陰」「宇治の山里」を立項した。なお『栄花物語』を中心に頻出する藤原頼通を指す「宇治殿」は除いたが、『源氏物語』や『とりかへばや』で登場人物を指すのに用いられている「宇治の宮」「宇治の橋姫」といった表現は、「宇治」の地名を喚起させる役割が強いものとみて、用例として掲げることとした。また「宇治の渡り（わたり）」については、「渡り（川越え、またはそれをするための場）」の意と「わたり（辺り）」の意とが混在しているが、いずれか判定しがたい用例もあったため、双方を一項目にまとめた。

大堰川……

静岡県の大堰川を指す場合はあげていない。

大原……

『狭衣物語』では巻四において帝となった狭衣の行幸先のひとつとして「大原野」が出てくるが、その平安朝文学における用例は多くはない。データとしては「大原」およびそれを含む「大原山(大原の山)」「大原の里」等を掲げた。「大原の里」について『山家集』1208~1217番歌に用例が集中しているが、これは高野山に滞在する西行と大原に居住する寂然法師とが交わした歌群において寂然が集中的に詠んだもので、西行の詠ではない。

春日……

『狭衣物語』では狭衣帝の行幸先としての「春日」が一例あるのみ。散文作品では、「藤氏」の春日詣でが描かれる『うつほ物語』には「春日」の用例も多くみられるが、物語文学の多くが「源氏」を主役とするため、「春日」の用例は日記文学・歴史物語に偏る。和歌では「春日」の多くが仲麻呂の「天の原……」の流れを汲み、「春日野」「春日の野辺」の多くが「若菜摘み」「飛ぶ火」といった名物と絡められ、「春日山」は藤氏讃仰を中心とする祝意と共に詠まれる、といったように、それぞれの歌語に一定の傾向が汲み取れる。ほか「春日の神」「春日の里」など、「春日」に絡む用例を務めて掲出した。

葛城……

催馬楽曲名は含まない。「葛城」「葛城(の)山」には「久米の岩橋(つぎ橋)」を作ったという(一言主の)神の伝説をふまえた表現が圧倒的に多い。その詠み方がなくなるわけではないが、『和漢朗詠集』あたりから徐々に「葛城のたかまの山」を詠む叙景歌が詠まれるようになる。『日本国語大辞典』(第二版)によれば、「葛城山」は「奈良県と大阪府の境、金剛山地にある山。金剛山を含めていう場合がある」一方、「高間山(高天山)」は、「金剛山の別名」である。このように、詠みぶりからは「葛城の山」は「葛城山」を指すことが多く、「葛城の高間の山」はそれとは異なるようであるが、確証はない。しかし、「葛城」と「葛城の山」「葛城山」は用例の意味内容に大きな異同がないので、「葛城」の一項にまとめた。「葛城の郡」を立項し、「葛上ノ郡」「葛下ノ郡」を含めた。

神山……

『万葉集』に散見される「神山」は山を神に見立てての一般名詞であるが、平安朝文学における「神山」は上賀茂神社の北にある山を指し、『狭衣物語』における用例も賀茂斎院となった源氏宮と関連づけられたものである。狭衣の詠歌に2例、それを作中引用する地の文に1例、計3例がみえる。しかし平安朝の他の散文作品には『栄花物語』の2例以外にみえず、その『栄花』でも和歌に詠みこまれたものであり、「神山」は歌語であると考えてよい。なお、データとしては同じ山を指す「其神山」の用例も掲げた。

亀山……

散文作品では『狭衣物語』以外には『多武峰少将物語』に1例あるのみだが、同じ山を指す「亀尾山(かめのをやま)」に用例を広げると『うつほ物語』に和歌で詠まれた1例がある。データとしては「亀山」のほか「亀の山」「亀尾山」の用例も掲げた。

賀茂……

『狭衣物語』では「賀茂(2例)」「賀茂の瑞垣(和歌中)」「御賀茂詣で」「賀茂の行幸」というかたちで出てくる。これらを一括して検索語「賀茂」として括り、他作品の用例を調査した。「賀茂詣で」「賀茂行幸」がらみでの散文作品における用例は散見されるが、和歌の用例はあまりみえない(ただし新編国歌大観の「かも」から「賀茂」を取り出すのが難しく、見落としがあるかもしれない)。「賀茂川(賀茂の川)」「賀茂の川~」に検索語を広げると、和歌の用例がかなり増える。散文作品では「賀茂の社」「賀茂の祭」が多く見られる。ほか「賀茂の斎」「賀茂の社」など、「賀茂」絡みの用例をすべてデータとして掲げた。

唐泊……

用例は極めて珍しく、『源氏物語』玉鬘巻のみである。歌集には、和歌にも詞書にも例がない。

北山……

『源氏物語』で光源氏に紫の君が見出される地として印象深い「北山」だが、その用例は他作品においては必ずしも多くはない。ただし『今昔物語集』では神秘・靈験の地としての「北山」がクローズアップされるようである。和歌集では春の桜・秋の紅葉の名所としての「北山」を舞台として詠まれた和歌が見られるものの、いずれも詞書で説明されるのみで歌語として「北山」が詠みこまれることはない。そこで参考例として一連の詞書の用例を掲げることとした。

木の丸殿……

『更級日記』の「木のまろ」の例を含む。歌集については、和歌中に例があるので、詞書のは省略した。←削除

越……

「越の国」のことであるが、「越」だけで用いられることが多い。「白山(白嶺)」や「海」の他、「高嶺」「かへる山」「尾山」「あらし山」「中山」なども多く詠まれている。景物としては、雪、帰雁、月等さまざまな自然が詠み込まれている。

「越路」も立項したが、詠みぶりに「越」と違いはないようである。

なお、『頼基集』18のように、離別歌で越の国に関わりを持つと考えられる場合も採ったが、『金葉集(二)』(雑下)648、『金葉集(三)』(雑下)640、『玄玉集』10、『順集』237、『小大君集』140、『安法法師集』27、『教長集』560、『治承三十六人歌合』69など、掛詞として「越」の意を持っているかどうか判断のつかなかったものも念のために挙げてある。

また、『今昔物語集』(13-23)①346には「越後ノ国、古志ノ郡」の例があるが挙げなかった。

木幡……

「木幡の山」「木幡の里」「木幡河」「木幡の森」「木幡の関」などと使われる。それぞれ別項をたてたが、それ以外は「木幡」に含めた。

嵯峨・嵯峨野……

「嵯峨野」は「嵯峨」の「野」が原義であろうが、『基輔集』162には「さかのの原」もあり、「嵯峨」と「嵯峨野」は、地名としては区別がつかない。多く、「さが(性)」との掛詞で使われるので、地名と確定しにくい例もある。「嵯峨寺」は「嵯峨」項に含めた。

慈心寺……

『狭衣物語』以外に用例が見出せなかった。

信田の森……

「信田」は「森」以外のものと結びついて使われていることはない。千枝、葛、ほととぎす等の言葉とともに詠まれる。

白山……

「越(路)の白山」と詠まれることが圧倒的に多いが、単に「白山」と詠まれている例もある。『浜松中納言物語』巻1のようなものは、普通名詞とみることはできないか、疑問の余地がある。

鈴鹿川……

『狭衣物語』には「鈴鹿川」が出るが、それ以外では「鈴鹿山」の用例が圧倒的に多く、「関」も詠まれる。「鈴鹿の山川」の例もあり、和歌の場合は山でも川でも詠みぶりに違いはないようである。山、川、関などの語がつかない例(『永久百首』323、『為忠家初度百首』689)は、地名であるかどうか不明。「鈴鹿の山川」「鈴鹿の山道」は便宜上、「鈴鹿(の)山」項に入れた。

須磨の浦……

『狭衣物語』の例は『源氏物語』を引く「須磨の浦」であるが、「こりずまの浦」「須
ページ(4)

磨のうらみて」のように掛詞として使われることが多い。「須磨の浦回(うらわ)」も「須磨の浦」の項に入れた。

「須磨」は「海士」が詠み込まれるなど、「須磨の浦」と共通する詠みぶりも多いが、一項を立てた。「浦波」「浦路」「浦風」「浦人」など、「浦〇」の普通名詞が続く例もあり、「関屋」「苦屋」「関守」「浜辺」などが詠まれているもの、『源氏物語』中の絵日記名としての用例などがあるが、これらは仮に「須磨」の項に入れた。その他は地名に準ずるものとして「須磨の関」を立項するにとどめた。

住吉の里……

『狭衣物語』に出てくる「住吉の里」の形での用例は『伊勢物語』に1例と『赤人集』(参考情報)と『清少納言集』にそれぞれ1例ずつ。「住吉」と「住之江」は地名表現としては別と考えられるため、調査対象は「住吉」のみとしてある。なお、明らかに神名と判断される場合はあげていない。類例としては、「住吉の浦」「住吉の岸」「住吉の浜」「住吉の社」をそれぞれ立て、そのほかは「住吉」の項にあげた。

竹生島……

『狭衣物語』以外では『今昔物語集』に1例、『更級日記』に1例。和歌の用例がないので、参考情報として、詞書に見える『定頼集』2例と『行尊大僧正集』1例をあげた。

筑紫……

『日本国語大辞典』(第二版)には「筑紫」は「古く、九州地方の称。九州地方全体を指す場合、九州の北半、肥の国・豊国を合わせた地方を指す場合、筑前・筑後を指す場合、筑前国、もしくは太宰府を指す場合などがある。つくのくに。ちくし。」とある。ここに挙げた用例のそれぞれがどのような意味で使われているかまでは触れることができなかったが、「筑紫(の)国」「筑紫九国」は立項した。「筑紫人」は用例を採らなかった。「筑紫」でそこにいる人を指しているものや「筑紫の五節」「筑紫の人」は、「筑紫」項に含めておいた。

とがへる山……

「とがへる」は鷹の羽が抜け替わる意。和歌においては「とがへる山」の形で読まれることが多い。『狭衣物語』では、飛鳥井女君の物語に、『拾遺集』1230「はしたかのとがへる山のしひしばのはがへはすともきみはかへせじ」(「とがへる山」は地名表現とは一般的に解されないようなので、一覧には含めていない)の引き歌表現として三度「とがへる山」の形で登場する。実在の地名ではないが、『狭衣物語』においては重要な表現だと思われるので、参考までに掲げた。

常盤……

叔母のもとに身を寄せた飛鳥井女君が生涯を閉じた地としての「常盤」、また女君がしばしば刹那的な我が運命を嘆いて詠じる歌語としての「常盤の森」が、『狭衣物語』では複数回みえるが、他の散文作品には皆無、和歌の用例もきわめて少ない。ただし「常盤山(常盤の山)」に検索対象を広げると和歌の用例は多く、データとしてはこれらも掲げた。

土佐……

『狭衣物語』以外の仮名散文では『土佐日記』1例、説話集である『古本説話集』2例・『今昔物語集』1例で、ともに紀貫之にかかわる例となっている。和歌では用例が限られる。類例表現として「土佐の国」「土佐の泊」をあげた。

長門……

『うつほ物語』における用例は人物の呼称。

中山……

「中山」単独の用例のみを調査すると、用例はきわめて少ない。言うまでもなく「さやの中山」や「きびの中山」は、和歌に散見される。散文作品では「さやの中山」が『更級日記』の道行のくだりに登場している。データとしては「さや」「きび」のほか「~の中山」表現については管見のかぎり掲げた。

なぐさの浜……

『狭衣物語』では源氏宮の形代・式部卿宮姫君を指す歌語として登場する「なぐさの浜」は、名草＝紀伊国の歌枕であり、平安朝の用例も和歌の中のそれに限られる。参考までにデータには「名草山」も掲げた。

嘆きの森……

『古今集』の誹諧歌での用例は地名とみなすべきか問題の残るところであるが、この歌によって、歌枕として認定されるに至ったとみなし、用例としてあげた。歌枕としての比定も問題がある地名表現であるが、『堤中納言物語』の「ほどほどの懸想」や『栄花物語』に用例が見られ、和歌の例も『金葉集(二)』『詞花集』『元輔集』『六条修理大夫集』に各1例、『散木寄歌集』に3例見ることができる。

難波……

和歌の用例は非常に多く、主なもので、勅撰集69例(含む『拾遺抄』)、私撰集65例、私家集187例、百首歌36例、歌合42例ほどを数える。また、「難波」に関する歌枕表現も多彩であるが、ここでは多くの用例が見られる「難波の浦」「難波潟」「難波江」を別項で紹介。また、用例の中で明らかに手習い歌である「難波津」を指す例は地名と見なさずカウントしなかった。

双の岡……

『狭衣物語』以外では『更級日記』に1例、『国基集』『堀河百首』『為忠初度百首』にそれぞれ1例ずつ見られる。都近郊の地名で「岡」にふさわしく「山里」まではいかないが、「野」よりは都からの懸隔を感じさせる地名表現であったようである。

西山……

詞書にしか出てこないなので、あえて詞書ながらカウントした。

仁和寺……

詞書にしか出てこないなので、あえて詞書ながらカウントした。

野中の清水……

片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』によれば「野中にある清水として普通名詞にも解し得るが、平安時代末期の『和歌童蒙抄』『奥義抄』などの歌学書は地名と解し、河内国説もあるが、おおむねは播磨国の印南野の歌枕としている」とのことであり、この指摘に従って「地名」を表すものとして用例を調査した。「野中の水」も同類の表現とみなし一項目としてデータとしたほか、『治承三十六人歌合』の経正朝臣詠「清水くむ野中」も含めた。

端山……

「端山繁山」「端山の繁り」が多い。『狭衣物語』の例をはじめ、地名ではなく、普通名詞かもしれない。ただし、「あなのは山」「つくばやまはやまのしげり」「常陸なるはやましげやま」などの例がある。また、『好忠集』249には、「端山木」の例もある。

比叡の山……

『今昔物語集』の用例は132例に及ぶ上、標題の例が多いということもあり、用例数のみを示した。また、『大鏡』では比叡山をすべて「山」としているように、「山」が「比叡の山」を意味する場合も多いが、ここでは地名表現を重視するということで、対象外としている。類例表現として「比叡」「日吉の(御)社」の項を立てた。

備前……

「備前」は「備前の国」の意であろうが、「備前(の)国」も立項した。

平野……

『狭衣物語』では狭衣帝の行幸先として登場し、『栄花物語』でも円融天皇の行幸先として出てくる。ちなみに円融期から平野祭に勅使が立てられるようになり、『枕草子』で

は「神は」段にも「平野」が取り上げられている。ただし和歌を含め、他作品に用例は多くはない。

富士……

『狭衣物語』では「富士の山」だが、「富士」「富士の嶺(ね)」「富士の嶽」「富士の峰」等も、指しているものは同じであろう。「富士のみ山」「富士てふ山」は「富士の山」に含めた。「富士」「富士の白嶺」「富士の高嶺」「富士の嶽」「富士の峰」「富士の嶺」を立項し、「富士の神主」「富士の柴山」「富士の鳴沢」「富士の宮」「富士の山辺」等は「富士」に含めた。

また、「富士川」を立項した。

船岡……

『狭衣物語』では狭衣帝が平野行幸の折、齋院に向かい合う位置にある「船岡(山)」をながめて源氏宮を思う、という文脈で出てくる。和歌の用例がいくつかあるほか、散文作品では『栄花物語』『今昔物語集』に複数例ある(特に円融院の子の日の遊宴における曾根好忠のおこ話を描いた『今昔』巻28第3話が著名)。

古野……

『狭衣物語』では「石の上古野の道」の形で2例出てくる。この形から判断すると、「古野(布留野)」をひとつながりの地名表現として把握していることが明らかなので、『狭衣物語』に出てくる地名表現としては「古野」を調査対象とした。ただし、類例表現として、「布留から小野」「布留の滝」「布留の中道」「布留の社」「布留の山」を立てた。

益田の池……

「恋をのみ益田の池のうきぬなはくるにぞものの乱れともなる」(『古今六帖』)および「ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞ益田の生けるかひなき」(『拾遺集』)によって歌語のイメージを決定づけられた「益田の池」(『拾遺集』の用例がそうであるように「益田」のみでも「益田の池」を指す)であるが、平安朝の用例は多くはない。ちなみに『源氏物語』夕顔巻で空蝉が詠歌に添えた「益田はまことになむ」は上述の『古今六帖』歌を引いた表現である。

三河……

「三河」は「三河国」のことと考えられるが、「三河の国」は別に立項した。「八橋」「しかすがのわたり」等を詠むときに使われることが多い。

御手洗(の)川……

「みたらし」も「御手洗(の)川」も同じものを指していると考えられるが、別に立項した。『古本説話集』(上6)413の「貴船」、『京極御息所歌合』27「春日」のように、場所が特定できる場合もある。特別な地名のない場合の多くは賀茂神社の御手洗川であろうと思われるが、必ずしも特定できるとは限らない。『古今集』巻11・501(『伊勢物語』65段)の「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」を踏まえて詠まれた歌も多い。

陸奥……

これも非常に用例が多いため、地名としての「陸奥」に限定した。したがって「陸奥守」「陸奥国紙」のようなものは含めていない。

武蔵野……

歌枕としての喚起力の強い地名表現であるので、類例表現(例えば「武蔵」)を考えることはしなかった。

室戸……

『狭衣物語』のみに見られた。類例表現として「室戸津」(『今昔物語集』1例)をあげた。

もる山……

『古今集』他にみられる貫之歌では白露、時雨のもる山（漏れる山）であるが、月の光、紅葉などの他、「人目漏る山」のような例もあり、「守る」意の「人守る山」のような用法もあった。

安の河原……

広い意味で地名表現とみなしたが、架空の地名（「天の川」）にかかわる表現。『万葉集』に2例あるほか、『頼政集』『道成集』『出観集』の1例ずつを除くとあまり用例数が多いたため、参考情報として『赤人集』の2例と詞書の例をあげた。『頼政集』『道成集』の用例はともに『狭衣物語』同様「千鳥」を景物とする。

八橋……

「三河の八橋」が多く、『伊勢物語』（9段）をふまえて詠まれた歌も多い。

横川……

出家者、僧の登場する散文テキスト、歌集詞書には多い。『多武峰少将物語』では、特に「憂き世」との掛詞となっているものが多い。歌集の和歌中の「よかは」の多くは「横川」という地名ではなく、「夜の川」のことと思われるので挙例しなかった。

吉野川……

「みよしののかは」は別項を立てた。「吉野」についての類例表現に関しては「吉野山」参照。

吉野山……

『浜松中納言物語』や『とりかへばや物語』の人物呼称と考えられる例はあげていない。「みよしののやま」は別項を立てた。「吉野」に関しては「吉野の峯」を類例表現として調査対象とし、また「吉野山」「吉野」「みよしの」については一部用例数を示す形で項目を立てた。

井出……

『枕草子』に1例みられるが、楽器名であり、明らかに地名を指していないので、省略した。

猪名山……

『狭衣物語』では一品宮と狭衣との関係が世間の評判となるが正式の結婚がまだであることを『万葉集』歌（巻11・2717）の引歌によって示す。「猪名」は摂津国の歌枕で、『万葉集』以来、多く歌にも詠まれている。類例表現として、「猪名野」「猪名の笹原」「猪名の柴山」「猪名のふし原」「猪名の湊」を項として立て、残る例は「猪名」の項にまとめてあげた。

小倉（の）山……

片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（増補版）によると、山城国と大和国の二箇所「をぐら山」がある。

『狭衣物語』のように「嵯峨のわたり」といった説明が伴っていたり、「大井河」「戸無瀬の滝」とともに詠み込まれていたりすれば山城国のものと確定できるが、和歌一首だけでは判別のつかないことも多い。かがり火の明るさに、「小暗い」のは名のみだとする発想や、紅葉、鹿の鳴き声、月などの代表的な秋の景物を詠むものが多いが、をみなへし、くつわ虫、ひぐらしなどの他、つつじ、ほととぎす、蛩、霞、霧などを詠み込んでいるものもある。「里」「すそ」「麓」などの言葉がつくこともある。

「小倉」項に「小倉のわたり」を含め、別に「小倉の里」を立項した。

緒絶の橋……

「橋」を踏む踏まないに恋の道の成否をなぞらえる「緒絶の橋」表現は、平安朝においては藤原道雅の歌とそれを踏まえたと思われる『源氏物語』の柏木詠・『狭衣物語』の狭衣詠の3例のみである。中世以降は定家が何首か詠んでいるのをはじめ愛好され、歌語として定着している。

小野……

『伊勢物語』で男が惟喬親王のもとへ通った小野、『源氏物語』で夕霧が落ち葉の宮のもとに通った小野、また、『うつほ物語』で実忠が住み、『源氏物語』で浮舟が身を寄せた比叡坂本の小野は、山城国愛宕郡である。しかし、狩り場で有名な「交野の小野」やおみなえしの咲く伊勢国の「かくれの小野」、「東路のいはたの小野」や「くるすの小野」もある。「小野」は元来普通名詞で、地名として具体的な場所を特定できないことが多い。

そもそも、『狭衣物語』の二例も、『万葉集』巻12・3048(3062)「みかりする かりばのをのの ならしばの なれはまさらず こひこそまされ」、『古今集』巻11・505「あさぢふのをののしの原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに」等の引き歌とも見られる。繰り返し詠まれるようになる炭焼き、炭窯をはじめ、雪とともに詠まれる「小野山」は大原に近い愛宕の小野であろうが、「遠里小野」はどこの小野かわからない。「小野」は、しば、卯の花の咲く細道、おみなへし、白露の置く秋萩、萩やならの葉、まきの葉、田、ほととぎす、うずら、きぎす、鹿のくさぶし、駒、等々、様々な動植物とともに詠み込まれているが、万葉歌や古今歌を基にしたと考えられる和歌も多い。『浜松中納言物語』の例は、物語名の一部であろう。『新撰朗詠集』690は掛詞であろうと思われるが不明。

また、「小野(の)山」を立項した。

姨捨山……

『今昔物語集』の底本では姨捨山伝説の当該歌の「姨捨山」を地名とみなしていないため、用例としてあげていない。『大和物語』では地名としての注が見られるため、あげた。『古今集』についても同様の判断で地名表現とみなした。